

二〇二一年度 (中学) 国 語

〈注意〉

始まりのチャイムが鳴るまでに、次の注意をよく読んでおきなさい。

- 一 始まりのチャイムが鳴るまで、問題や解答用紙に手をふれてはいけません。
問題一冊(十四ページ)と解答用紙一枚です。
- 二 試験の始めと終わりは、チャイムで合図します。
試験時間は、八時三十五分〜九時二十五分の五十分間です。
- 三 始まりのチャイムが鳴ったら、解答用紙に受験番号、氏名を記入しなさい。
- 四 問題の内容について質問してはいけません。
- 五 困ったこと(筆記用具を落としたときなど)があつたら、だまって手をあげなさい。
- 六 持ち物をかしたり、かりたりしてはいけません。
- 七 答えはすべて、解答用紙に記入しなさい。
- 八 終わりのチャイムが鳴ったら、すぐに筆記用具をおき、解答用紙をうらがえしにして、問題の上におきなさい。
- 九 解答用紙だけ回収します。

— 次の文章はフィンランドの小説「ムーミン」シリーズの登場人物について述べたものです。これを読んで、後の問に答えなさい。

「あの子は怒ることができない」とちびのミイが言う。「そこよ、問題は。いい、よく聞いて」とミイは言葉をつぎ、ニンニにぐいと近づくと、おっかない顔をして睨んだ。「あんなね、闘うすべを学ばないかぎり、自分の顔をもつことはできないのよ」

『ムーミン谷の仲間たち』

* * *

ニンニは姿が見えなくなった女の子である。底意地の悪いおばさんに皮肉を言われつづけているうちに、しだいに身体（からだ）の輪郭がぼやけ、ついには跡かたもなく消えてしまったのだ。トウティッキが少女をムーミン屋敷に連れてきた。「ほら、これがあなたのあたらしい家族よ。ときどき妙なことをやらかすけど、まあたいていは気持ちのいいひとたちだからね」。こうしてニンニは、姿がもとどおり見えるようになるまで、ムーミン屋敷に住むことになる。

しかし、姿の見えない子とつきあうのは、思ったより **A** が折れる。首らしきところには銀の鈴がひとつ、少女の動きに合わせてかぼそい音をたてる。おばさんがニンニの居場所のケントウをつけるために、少女の首につけたものらしい。慣れないせいかもしれないが、見えないものに視線をとめるのはむずかしい。ムーミンたちも、ニンニに話しかけると、どうしても目にとびこんでくる鈴を見てしまう。「もちろん、鈴のちよつと上あたり、つまりニンニの眼があるとおぼしきあたりに眼をとめようと努力はする。けれども、知らぬまに視線はずり落ちて、眼に見えるものの上にとまってしまふ。そして、ぶしつけなことをした、と気まずい思いをするのだった」。

I

というあたりまえのエチケツトが実行しにくいので、とまどっているのだ。

ニンニは遊んだこともないらしい。ムーミントロールが遊びを教えても、「ええ、そうね、たのしいわ、もちろんよ」と、礼儀ただしいが楽しくもなんともなさそうな答えが返ってくる。おもしろい話にも反応しない。たまに笑っ

てもマ**b**トはずれなところで笑うので、話しているほうは気がそがれる。受けない冗談を言っている自分がばかみただい。

はじめは姿の見えない子に **B** 津々だったムーミントロールも退屈な遊び相手にしかならないとわかった、しだいにケイエンするようになる。もしも自分の姿が見えなくなったら、それこそ山ほど遊びを思いつくだろうに、と首をひねるが、愛されて育ったムーミントロールには肝心なことがわかっていない。

「姿が見えない」とはちびのミイが指摘したように「顔がない」存在、そのひとらしい個性やたしかな信念をもたない存在、もっと平たくいえば、ひとを惹きつける魅力のない存在を意味する。ニンニの姿が見えなくなってしまうのは、言いかえすこともできずに、おばさんの皮肉にひたすら堪えてばかりいたからだ。そういう受け身の姿勢が、ちびのミイには我慢ならない。やられたら倍にしてやりかえす、これがミイのモットーだ。ただやられっぱなしの犠牲者には同情しない。たいていの場合、同情はなんの役にもたたないと知っている。冷酷なのではない。おそろしいまでにリアリストなのだ。

『ムーミン谷の冬』で氷姫をまともに見て凍死したリスについて、ミイはこう言っている。「あたしは悲しい気持ちにはなれないな。機嫌がいいか怒っているかのどちらかよ。悲しめばリスを助けることになる？ でもいうの？ でもあたしが氷姫に腹を立てたときはね、おりをみて脚に噛みついてやる」。死んだリスの仇討ちとして、ではない。いやというほど噛みつかれば、氷姫も二度とリスを凍らせようなどという妙な気を起こすまい。ミイの怒りは、他のリスたちを第二、第三の犠牲にしないために発揮される。ただし、怒りは大切なエネルギーだから、むだづかいはない。

こうしたドライな言動に、ミイの照れを読みとることもできよう。ムーミントロールがひどくセンチメンタルにリスの死を嘆くので、なおさらハードボイルドに決めたくなる気持ちもわからなくもない。作者ヤンソンに言わせれば、ミイは少量でも効くスパイスで、「甘ったるい感傷に流れそうなとき、びりつと辛口のコメントをして物語をひきし

めてくれる」。

ミイは無意味な気休めを言わない。もっぱら挑発する。元気というのは与えられるものではない。与えられたものは、またすぐ奪われてしまい、根本的な解決にはならない。ミイはそういう一時しのぎを嫌う。「だいたい、あなたには気力つてものがあるの？ わたしにぶちのめされたい？ どうなのよ！」と、ニンニを容赦なく追いつめ、彼女が **II** きつかけをつくらうとする。

しかし、ニンニが「自分の顔」をとりもどすきつかけは、ミイの押しつけがましい激励ではなく、さりげないムーミンママの気配りから生まれる。例によってママは、自分がしたいことではなく、相手がしてほしいことはなにかを考えて行動する。これはママの特技といってよい。

たとえば、さえない茶色の服を着ていた少女に、ばら色のワンピースとその残り布でリボンを縫ってやる。これだけでもずいぶん気分が明るくなったはずだ。ニンニが作りたての林檎ジャムのおびんの大瓶を落として割ってしまったときも「あら、これっていつも蜜蜂にあげてた瓶ね。おかげで野原まで運ぶ手間がはぶけたわ」と絶妙のフォローをする。

④ やがて、ニンニの首から下は現れたものの、あいかわらず顔は見えない。

ある日、家族みんなで海辺にピクニックに行く。ニンニは海辺に立ちつくしてゼツクする。生まれてはじめて海を見て、そのはてしない大きさに圧倒されたらしい。パパはふと茶目つけをおこし、ママの後ろにまわり、彼女を海の中に突きおとすふりをする。もちろん冗談だ。すると電光 **C**、ばら色の稲妻が走り、白く尖った歯がパパの尻尾にがぶりと食いこみ、パパのほうが海のなかに転がりおちた。

「すごい！ やった！」とミイは叫び、感心することしきり。白い歯の持ち主はニンニだった。しかも顔が見えるようになって。真っ赤な顔をして、浜辺に両脚をふんばって立ち、われを忘れてかんかん怒っている。あんなやさしいママを怖ろしい海に突きおとすなんて許さない。おそらく生まれ初めてはじめて心の底から腹をたて、怒りをはっきりと表すことができたのだ。怒りをあらわにし、闘うすべてを学んだとき、ニンニは「自分の顔」を手にいれた。

「あんたね、闘うすべてを学ばないかぎり、自分の顔をもつことはできないのよ」と喝破したミイの予言は、みごとに成就したのである。

(富原真弓『ムーミン谷のひみつ』による)

問一 (1) 本文中の「**A**」が折れる」の **A** を補うのにふさわしいことばを漢字一字で答えなさい。

(2) 本文中の **B**・**C** を補うのにふさわしいことばをそれぞれ漢字二字で答えなさい。

問二 本文中の **I** を補うのにふさわしいことばを考え、15字以内で答えなさい。

問三 — 線部①について。ムーミントロールにはどういうことがわかっていないのだろうか。その説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ニンニはおばさんと二人の生活が長かったので、子供らしい遊びを考える経験が少なかったということ。
- イ ニンニは相手に自分の眼をまともに見てもらえないので、腹が立って遊ぶ気分ではないということ。
- ウ ニンニは自分を認めてもらえずにいたので、自分から何かをするという意欲を失っているということ。
- エ ニンニはムーミントロールの気を惹こうとしているので、風変わりな態度をとっているということ。

問四 — 線部②のような考え方がはつきりと読みとれる一文を、次の段落のミイのことばの中からさがし、その最初の五字をぬき出して答えなさい。

問五 — 線部③について。「ミイの照れ」とは具体的にどういう気持ちなのだろうか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分のムーミントロールへの思いを明らかにすることが恥ずかしい。
- イ 自分の実力や地位をやたらとひけらかすことが恥ずかしい。
- ウ 自分が力を出し惜しみしていると思われることが恥ずかしい。
- エ 自分の優しさなどの感情を素直に表現することが恥ずかしい。

問六 本文中の Ⅱ を補うのに最もふさわしいことばを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分から変わる
- イ 自分をためす
- ウ 自分を忘れる
- エ 自分から逃げる

問七 — 線部④について。ニンニの首から下が現れたのはなぜか。その説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 他人から愛されていることを実感し、自分がここにいってもいいのだと思いはじめたから。
- イ 失敗を遠まわしに指摘され、もっと自分の責任を果たそうと思うようになったから。
- ウ 自分の容姿の美しさにあらためて気づき、それをもっと前面に出してもよいと思ったから。
- エ 服のセンスの悪さを教えられ、今まで感じたことがないような恥ずかしさを覚えたから。

問八 — 線部⑤について。ニンニが「自分の顔を手に入れた」とはどういうことか。本文全体をふまえてわかりやすく説明しなさい。

問九 — 線部 a、d のカタカナを漢字に直しなさい。

二 次の文章は、シンガーソングライター^{うえむらかな}の植村花菜さんが、自身の経験を述べたものです。筆者は、家の事情があって、子供時代の大半を祖母と二人で暮らしていました。これを読んで、後の間に答えなさい。

デビューから二年たった二〇〇七年八月末、母から、おばあちゃんが入院したという連絡が入った。七月に帰ったときにはそれほど具合が悪そうではなかったのに……。

七月末に、大阪での仕事のついでに帰っていた。いつものように寝ているおばあちゃんの部屋の明かりをつけ「おばあちゃん、ただいま」と声をかける。おばあちゃんは、ベッドから体を起こしてくれて、「おかえり。帰ってきたんやね」と微笑^{ほほえ}む。私はおばあちゃんの手を握り、簡単な近況報告をする。

「帰ってきたで、元気にやってるよ」「それはよかったね。今度はいつ帰るん?」「仕事があるから明日には東京戻るよ」「体に気いつけやー」

おばあちゃんが を見せたら会話を終える。

「おばあちゃん、おやすみ」

部屋の明かりを消す。これがいつもお決まりのおばあちゃんとの時間だった。会話の内容もいつもほとんど同じ。ただひとつ変わっていったことは、私が握るおばあちゃんの手がだんだん細く小さくなっていったこと――。

母に「おばあちゃん、寝てばかりやな、またやせたんちゃう?」と尋ねると、「最近ごはん全然食べへんねん。」

『ごはん食べ』って言っても、いらんって言うんよ」と困っていた。それを聞いた私は、「それはアカンなあ」ともう一度おばあちゃんの部屋の明かりをつけた。

「おばあちゃん、ごはん食べへんらしいやん。ちゃんと食べなあかんで」

「別にあんまりお腹空いてへんからいらん」

「どっか悪いんちゃう? ちゃんと病院行きいや」

「行かへん。おばあちゃん、どこも悪くないから行かんでいい」

昔から病院が嫌だったおばあちゃんは、頑^{がん}として首をタテ^aに振らない。

「でも、ごはん食べへんかったら心配やし、おばあちゃんが病院行くの嫌^{いや}やったら、花菜^{かな}と一緒に付いていくから、一緒に行こうや。花菜が今度帰ってきて、休みがあるときに一緒に行こうや」

「行かんでいい。自分の身体のこととは自分がいばんわかる。おばあちゃん全然どこも悪くないから。行かんでいい」

どれほど説得しても、いくら頼んでも、おばあちゃんは考えを変えようとしなかった。

「わかった……。じゃあ、ごはん食べや」

私は再び部屋の明かりを消した。

私は、私が病院へ一緒に行くと言ったら、おばあちゃんはいくかもしれないという甘い考えを持っていた。だって、おばあちゃんといちばん仲良しなのは私だから。でも、私が言っても「行かない」と言い張る。これは絶対に行かないだろう。

この時、一瞬、「おばあちゃん、もうアカンのかな」と思った。冗談で、「この夏がヤマかな。うちらも覚悟せなあかんのかもしれんね」と母と話したほどだ。でも家族って不思議だ。不安に思う反面、おばあちゃんの不滅、このま

まの状態がこれからもずっと続いてくれるような気もどこかでしていた。いや、そう信じたかったのかもしれない。①だから、東京に戻り、それから間もなく、母から「おばあちゃん、とうとう入院したわ」という電話がかかってきたときはびっくりした。ちょうど一週間後、大阪で仕事が入っていたので、そのときお見舞いに行くことにした。心配な気持ちと、でも病院でお医者さんに診^みてもらえるならかえってよかったという気持ちが入り交じった。

母は電話で教えてくれなかったが、おばあちゃんは胃がんの末期だった。いつ亡くなってもおかしくない状態と医師から告げられていたらしい。

一週間後、大阪に着いた私は病院へ直行した。病室には意外にも元気なおばあちゃんがいた。

「おばあちゃん、ただいま」
「帰ってきたんやね。おかえり」

「おばあちゃん、やっと入院したな。あんなに言ったのに病院行かへんで。まあ、これで安心やね」

「したくなかったんやけど、仕方ない」

「お医者さんに治してもらって、はよ元気になるや。またごはん食べれるようにならなアカンで」

「そやな」……少ししか話していないのにおばあちゃんは、「おばあちゃん疲れたから寝るわ。花菜ももう帰り」と目をつぶった。

「じゃあ、明日のお昼に東京に戻らんとアカンから、明日の午前中にもう一回来るな。バイバイ」

おばあちゃんがいつもと変わらなかったこと、元気な顔を見られたことで私は安心し、実家に戻った。母にも「おばあちゃん、元気そうやん。よかったね」と能天気^②に言い、家族といつもどおりに過^ふごし、布団^{ふとん}にもぐった。

翌朝五時。姉にたたき起こされた。「病院から電話や。おばあちゃん危篤^{きとく}やて」。そんな！ 昨日、おばあちゃん元氣やったやん……。着の身着のまま家を飛び出し、病院へ向かった。

病室のドアを開けると、おばあちゃんはハア、ハアと苦しうに息をしていた。「おばあちゃん、おばあちゃん」と呼びかけ手を握りしめた。小さくなってしまったおばあちゃんの手はアタタかかった。

「おばあちゃん、おばあちゃん、花菜やで、わかる？」。つぶられた瞼^{まぶた}の奥で瞳^{ひとみ}を動かしてくれたような気がした。

「花菜ここにおるで！」。手を握り声をかけ続けた。でも、おばあちゃんの苦しうだった荒い呼吸がだんだん穏やかな呼吸に変わっていったとき、私は悟^{さと}ってしまった。

二〇〇六年のホワイトデー、いつも私を慰^{なぐさ}めてくれた愛犬チャッピーが亡くなった。チャッピーの最期^{さいご}を看取^とったのは私だ。おばあちゃんの様子は、あのかのチャッピーとまったく同じだった。チャッピーも亡くなる前、ハア、ハアと、とても苦しうだった。その呼吸が、体を撫^なでていたら、だんだんと、穏やかな、楽そうな呼吸

に変わっていった。「大丈夫そうやね、よかった。チャッピー、しんどのおさまったんやね」と話しかけたのもつかの間、そのまま息をしなくなってしまった。

あのとときと同じだ――。

*

病室の窓から、柔らかくて優しい光が差し込んでいた。

おばあちゃんは、うつすらと薄化粧^{はくせい}を施^{ほどこ}され、穏やかな顔でベッドに横たわっていた。薄紫色^{はくしき}のモヨウ^cが入ったゆかたを身にまとい、三つ編みにまとめた髪を片方へ流し、いつものおばあちゃんだった。「花菜、おかえり。今度はいつ帰るの？」と今にも尋ねられそうだった。

おばあちゃんは、本当に小さかった。④こんなに小さかったかと思つた。小学生のとき、一緒にキッチンに立っていたら、おばあちゃんと肩の高さが並んで「おっ、一緒や」と胸を張り、そのうちにおばあちゃんより背が高くなって、「おばあちゃん抜いちゃったね」と笑顔で会話を会話を思い出した。私の背が伸びるにつれ、おばあちゃんが縮んでいくような気がして、それと同時にとおばあちゃんとの距離が開いていった。

葬儀^{そうぎ}が始まった。おばあちゃんの人生が語られていく。

おばあちゃん、沖繩に近い鹿児島県の小さな島・沖永良部島^{おきのえらぶ}に生まれた。島には小学校が一つしかなく、おばあちゃんのお父さん、つまり私のひいおじいさんは、その小学校の校長先生だった。厳格な父とたくさんのきょうだいの中で苦労したらしい。おばあちゃん以外のきょうだいは勉強もスポーツもできるブンブ^d両道で、ひとり落ちこぼれ扱いを受けていたおばあちゃんは耐えられず、島を出た。最初の結婚と出産。そして離婚。ひとりで働いて子育てしていたときの、植村のおじいちゃんとの出会い……。

アラタめて聞くと、知らないことばかりだった。

私、おばあちゃんのこと、全然知らなかった。ずっと一緒にいたのに、何をしてたんだろう。どうしてもつという話をしなかったんだろう。もつともつと話せばよかった……。おばあちゃんの故郷・沖永良部へも、「いつか一緒に行こうね」と約束していたのに結局行けなかった。一緒に買い物にだって行きたかった。時間はいくらでもあったはずなのに……。そのことが哀しくて哀しくて、涙がいくらでも出た。

おばあちゃんの人生は、孫たちのくだりになった。

「和嘉さん（おばあちゃんの名前）は、音楽が好きで、特にカントリーミュージックを好んで聴いておられました。アコースティックギターの音色が大好きで、孫の花菜さんが音楽をやられ、アコースティックギターを弾かれて、ことをとても喜んでおられました」

……えっ!? おばあちゃんアコースティックギター好きやったんや!

それも初めて聞く話だった。家ではさんざんギターを弾いていたけれど、私は面と向かって、おばあちゃんのためにギターを弾いてあげたことが一回もなかった。⑤おばあちゃんがギターが好きと知っていたら、いくらだって弾いてあげたのに。弾いてあげなかったのに……。

⑥私は、なんてひどい孫だったんだろう。おばあちゃんに申し訳なくて、たまらなくなつて、この日、この瞬間、人生でいちばん泣いた。人はこんなにも涙が出ることを、このときに知った。

葬儀の後、叔母さんからこう聞かされた。

「花菜ちゃん、おばあちゃんね、『花菜は今度いつ帰ってくるの? 花菜はちゃんと元気でやってるの?』って、口を開くたびに言ってたんだよ。本当にいつも花菜ちゃんのことばかり。だからおばあちゃん、最後は、花菜ちゃんが帰ってくるのを、ずっと待ってたんやね。花菜ちゃんが帰ってきて、顔を見たから、安心して逝きはったんやね。

おばあちゃんのこと、いつも思い出してあげな。それだけでおばあちゃん、喜ぶと思うで」

思えば、私が今、ギターを弾いたり歌ったりするのも、カントリーミュージックが好きだったおばあちゃんの影響かもしれない。ピアノで挫折した作曲をギターでやってみようと思ったのも、ギターですんなり曲ができたのも、おばあちゃんとの生活があったから、おばあちゃんの血を受け継いでいたからかもしれない。おばあちゃんがいてくれたから、今の私があるのかもしれない。

私がおばあちゃんのことを思い出せば、おばあちゃんは、私の中で生き続けるのかもしれない。

（植村花菜『トイレの神様』による。ただし、途中を省略した部分がある。）

問一 線部 a e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 本文中の を補うのにふさわしいことばを考え、五字前後で答えなさい。

問三 線部①の「だから」は、どういう内容を受けたものか。次の中で最もふさわしいものを選んで、記号で答えなさい。

ア 「おばあちゃん、もうアカンのかな」と思ったこと。

イ 家族とは不思議なものであること。

ウ おばあちゃんの状態も、今のままでずっと続くように思っていたこと。

エ 家族はずっと同じ状態だと信じたかったのかもしれないこと。

問四 — 線部②「能天氣」について。

- (1) ここでの意味を答えなさい。
(2) このときの「私」が「能天氣」だったと後になって思う理由を、わかりやすく説明しなさい。

問五 — 線部③について。どういうことを「悟ってしまった」のか。簡潔に説明しなさい。

問六 — 線部④について。「私」がこのように思ったことと、最も関わりの深いものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 人間というものは、命を失うと体が小さく縮んでしまうものだという発見をしたこと。
イ いつの間にか、自分にとっては、おばあちゃんの存在感が小さいものになっていたこと。
ウ 長い間おばあちゃんと離れて暮らしていて、おばあちゃんの変化には気づかずになっていたこと。
エ 心に刻まれているおばあちゃんの姿は、最も身近に接していた子どもの時の印象だったこと。

問七 — 線部⑤について。「弾いてあげた」と「弾いてあげなかった」の表現の違いに注目して、このように言い直している「私」の思いを、わかりやすく説明しなさい。

問八 — 線部⑥について。それまでの「私」は、自分のことを、このように思っていたはずである。そのことが最もはっきりとわかる20字前後の表現を、本文中の*印(10ページ)より前の範囲からぬき出して答えなさい。

問九 本文全体から読みとれる「私」について、次の中からふさわしいものを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 病院に行きたがらないなど、おばあちゃんの頑固なところもよく理解していて、そんなときは逆らわないようにしている。
イ チャンスがあれば、できるだけおばあちゃんのところに戻って、二人の時間を少しでも持つように心がけていた。
ウ 何よりもおばあちゃんと話をするのが好きで、少ししか話ができないときなどは、不満な気持ちになってしまう。
エ おばあちゃんとの生活が自分にとってはふるさとだという気持ちがあり、「ただいま」という言葉も自然と出てくる。
オ 涙もろくて、自分にとって悲しいことやつらいことがあったりすると、周囲の状況も考えずに、泣きぐずれしてしまうことがある。

問十 本文全体から読みとれる「おばあちゃん」について、次の中からふさわしいものを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 決して病院に行こうとしないのは、過去の苦労が影響していて、身近な人以外は信じられないからである。
イ いつも同じような言葉のやりとりしかせず、自分の本当の気持ちは、家族にも気づかれないようにしている。
ウ 自分のところを出て行った花菜に、自分の気持ちがあんなか届かないことを残念に思いながら待っている。
エ 花菜のことを、自分のこと以上に気にかけているのだが、それが花菜の負担にならないように接してきた。
オ 自分が何か言ったわけでもないのに、好きなギターを奏でるようになった花菜の姿を、そっと見守っていた。

受験番号

氏 名

問一
(1)



(2)

B

C

問

[illegible]

問三

7

問四

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

問五

9

問六

107

問七

問八

[illegible]

問九

a
b
c
d

問

a
b か か つ た
c
d
e め て

問

1. The first part of the paper is devoted to the study of the asymptotic behavior of the solutions of the system (1) as $\epsilon \rightarrow 0$. It is shown that the solutions of the system (1) converge to the solutions of the system (2) in the sense of the weak convergence in the space $L^2(\Omega; \mathbb{R}^n)$.

問三

9

問四

(1)

(2)

	(2)
--	-----

問五

問六

7

問七

--	--	--	--

問
八

[illegible]

問九

問
十
